

宮本憲一『環境と自治 私の戦後ノート』

わが師・宮本憲一先生の数多くの本が自宅書棚に並んでいる。1996年に刊行された、この本もよく手にする一冊だ。「この本の装幀を『恐るべき公害』以来、最も信頼のおける編集者であり批評家である田村義也さんがひきうけてくださったことは至幸のことです」と書かれているように、素晴らしい装幀だ。

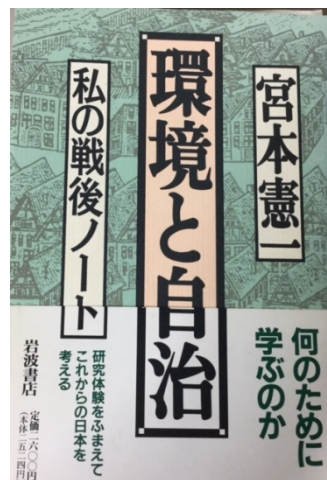
本書は装幀だけでなく、内容も多岐にわたり深みがある。第一部「環境保全と住民自治をもとめて」、第二部「ひるむな 足もと掘れば泉」から構成される。主な項目だけでも列挙してみよう。

阪神・淡路大震災の教訓、沖縄の自治と日本の「自立」、地方自治研究への旅立ち、企業社会と草の根保守主義、公害と住民運動、「革新自治体」と公害裁判、新保守主義の到来と混迷へ、公害研究の旅、国際的研究・教育の協力、私の師匠たち、現代の政治経済学を求めて。

阪神・淡路大震災から始まり、先生の公害・地方自治研究の歩みが綴られ、1993年2月2日の大阪市大退官記念講演へと続く。この本のなかに「ゴムまりの理論」というのが出てくる。これを読んで先生のある講演を思い起こした。レポートでも紹介した、私が事務局長をつとめた1999年の「第18回日本環境会議名古屋大会」の先生の記念講演だ。環境問題だけでなく、障害者問題を考えるうえでも示唆に富む指摘だ。障害者差別解消法が施行されたが、それを力にしていくには住民の世論と運動が欠かせない。

私がかねてから、「ゴムまり論」というものを主張してしまして、まず制度を変えていかなければならないと思っています。おそらくいろいろな提言がこの会議で出てくるでしょうし、制度というのは、ゴムまりと変わらないものだろうと思います。ゴムまりが膨れ上がったゴムまりになるためには、住民の世論と運動という空気が入って初めてゴムまりになるのです。これは日本の環境の歴史を見ればわかります。制度が作られても、住民の世論や運動が弱くなれば、ゴムまりはペしゃんこになって何の機能も果たしません。しかし、ゴムまりは皮がいます。制度がないと困ります。しかし、制度を作っても、私たちが環境を前進させていく、環境を守り、環境を美しくしていく世論と力という、ゴムまりに力を与える空気を詰め込む運動を忘れてはならないのです。

今、「日本環境会議」は20年を迎え、皆さん方とともに、こういうゴムまりの皮をつくる、つまり環境政策という制度を作るとともに、その中にそれが機能する十分な力を与えるために努力したいと思っています。



(2016年5月5日)